心身障害学研究,20,83-91,1996

原　著

絵本理解とその発達順序性
― 発達援助としての絵本利用の基礎研究 ―

石　川　由美子*・前　川　久　男**

本研究は、絵本を媒介とする活動が子どもの発達の過程とどのように関わりながら獲得されていくのかを明らかにすることを目的とした。対象は月齢0カ月～74カ月までの乳幼児で、調査用紙には母親が回答した。各調査項目を2項ずつ対にして、Ordering Analysisを行い順序性を判定した。その結果、絵本の項目の獲得には、内容の理解や構造性の理解といった事柄だけではなく、要求、指示理解、伝達といった対人関係に関わるスキルの発達が深く関わっていることが示された。また、内容や絵本の構造性の理解には、記憶の発達が関与していることも示唆された。

以上の結果は、絵本を発達援助の有効な素材として、子どもの発達レベルに応じて適切に利用するための基礎的な資料といえる。

キー・ワード：絵本理解　発達援助　Ordering Analysis　対人関係

Ⅰ．はじめに

絵本を媒介とする活動が子どもの発達に有効であると主張する立場には、主に次の3つがある。第1は、絵本作家(渡部，1978[20])、出版関係者(松居，1981[10])および教育的、養育的な場での絵本の利用者(松岡，1987[11])などに代表される、経験主義的な立場からの意見である。これらの立場をとる人達は、長年、絵本を作成し、子どもに利用してきた経験から、良い絵本とはどのような絵本か、絵本の与え方、読み聞かせの仕方などに関して興味深い示唆を与えてくれる。しかし、それぞれの立場を主体に絵本観を論じていることから、客観性にかける点や絵本を利用するすべての年齢段階の子どもに普遍的に当てはまるかどうかには疑問が残る。第2は、絵本を介しての相互作用を基本とした研究の立場である。これには、言語発達、特に子どもの語彙獲得に視点を当てたもの（Ninio, 1983[13]；Whitehurst, Falco, Fischel, DeBaryshe, Valdez-Menchaca, and Caulfield, 1988[19]）や発達の最近接領域の視点から親の働きかけに焦点を当てたものなどが含まれている（DeLoache and DeMendoza, 1987[6]；Pellegrini and Brody, 1985[15]）。これらの研究から、絵本を介したやりとりが、子どもの語彙獲得を促進することおよびその際、子どもの発達に応じて母親が働きかけを変えることで、子どもが言語を理解しやすい環境を作り出していることなどが明らかとなってきた。しかし、ここで利用されている絵本のほとんどが、具体物を描いただけのものであること、また、対象を低い年齢層にしぼっているものが殆どであるといった問題点も同時に指摘できる。第3は、物語記憶研究（高木，1978[17]；Cornell, Senechal, and Broda, 1988[4]）の立場である。これは絵本を繰り返し読み聞かせることや絵本がもつ繰り返しの構造が、子どもの再認や再生の援助となることおよび物語理解に際して、子どもが物語スキーマを手がかりとしていることなどを明らかにしてき

*心身障害学研究科
**心身障害学系

ている。しかし、この研究では、対象を高い年齢層としていることや起承転結のはっきりした絵本のみを使用している点などに問題が指摘される。

以上に述べてきた3つの立場からも絵本が、発達の早期から発達を援助するものとして利用できる素材であることは、ある程度まで明らかにされてきているといえよう。発達に遅れのある子どもに対しても、絵本利用の有効性が、少数ではあるが述べられてきている（Butler, 1980[2]；Beveridge, Conti-Ramsden, and Leudar 1989[3]；Yoshinaga-Itano and Downey, 1986[22]）。しかし、どの発達のレベルから絵本が利用できるのかあるいは、どの発達のレベルではどのような絵本でどんな関わりをもつのが、最も発達を援助しうる方法であるのかといった点には、断片的な示唆が得られているに過ぎない。これは、それぞれの立場から関心のある部分のみを検証してきたことによるのかもしれない。この研究の目的は、先に述べた絵本研究における問題点を踏まえた上で、改めて絵本が発達をどのように援助しうるのかを明らかにしていこうとするものである。その第一歩として今回の研究では、現在、絵本として使用されている本の特徴的ないくつかの構造と、それらの絵本を介して生じるであろうやりとりが子どもの発達レベルとどのような関わりを示すのかについて明らかにすることを目的とした。

II．方　法

1．調査対象

月齢0〜74カ月（6歳2カ月）までの乳幼児で調査用紙への記入は母親であった。

2．調査項目の選定と調査用紙の構成

乳幼児の発達に関わる項目は、筑波大学小林研究室、前川研究室で開発されてきた「ことばのようす」および乳幼児精神発達質問紙（津守・稲毛，1965[18]）を参考にした。また絵本の項目に関しては、石川・石川（1994[7]）の絵本の構造としての特徴と、永田（1985[14]）、佐々木（1975[16]）の事例研究を参考にした。以上の項目を分類し

Table 1　調査表の領域と項目番号および項目数

領　域	項目番号	項目数
Ⅰ．情緒・愛情	001〜008	8（8）
Ⅱ．興味・関心	009〜034	26（15）
Ⅲ．やりとり行動	035〜052	18（15）
Ⅳ．伝達行動	053〜074	22（15）
Ⅴ．誘いかけに対する反応および指示理解	075〜090	16（9）
Ⅵ．遊び	091〜124	34（13）
Ⅶ．絵本	125〜149	25（23）
	計	149（98）

（　）内は最終の項目数を示す

なおし、7領域、149項目を選定した（Table 1）。また、項目に対する母親の判断をできるだけ正確に保つため、調査用紙を月齢0〜23カ月、24〜41カ月、42〜74カ月の3種類に分けた。区切る月齢の時期は、通過率の示されていた項目により判断した。「ことばのようす」では、通過率の図を参考に獲得開始時期からほぼ80％以上の獲得を示す月齢まで、乳幼児精神発達質問紙では通過率の下限値として示された月齢（通過率40％）から約6カ月前までを調査の対象月齢となるようにした。なお、通過率がはっきりしない項目についてはすべての調査用紙に記載した。調査用紙のフエースシートには、対象児の生年月日、性別、記入年月日の記入欄をもうけた。それぞれの項目には、「ある」・「あった」・「ない」の3つの選択肢を回答欄としてもうけた。

3．調査の手続き

調査の趣旨を説明し協力が得られた幼稚園、保育園、乳幼児サークル等に調査用紙を配布し、一括して回収する形式をとった。現在までに、月齢0〜23カ月の調査で219名、24〜41カ月の調査で170名、42〜74カ月の調査で469名の調査用紙が回収された。

4．結果の処理

①通過率算出と項目ネットワークの作成

3種類の調査用紙ごとに、記された回答を次のように符号化した。「ある」・「あった」を1（通

過)、「ない」を0(未通過)とした。それから、各調査項目について3カ月ごとの通過率を求め、通過率の高い順に並べ変えを行った。その後、すべての2項目対に関してOrdering Analysis (Airasian and Bart, 1973[1]) に基づき順序性を判定し項目ネットワークを作成した。その際、順序性を判定するため三宅(1984 a[8]; b[9])による規準を採用した。

②項目の妥当性に関する判断

絵本に関する項目と発達に関する項目の獲得の順序性を検討するのに適当でない項目を次の基準により選別しネットワーク図から除外した。(1)通過率が低く(70%以下)、獲得が不安定であった項目、(2)項目の獲得開始の時期から獲得に至るまでの時期と、調査を行った月齢とが一致していなかった項目、(3)項目ネットワーク図の作成の結果、絵本項目との順序性が認められなかった項目、(4)その他(家庭での状況を聞くには明らかに表現が適切でなかったもの)。なお、通過率70%以上を発達による項目獲得の目安とした理由は、月齢が上がるに従っての環境要因の影響によると考えられる通過率の不安定性を考慮したことによる。従って、項目ネットワークの作成には7領域98項目が使用された(Table 1)。

III. 結果および考察

1. 絵本の項目通過率に関して

絵本の項目に関して、70%以上の通過率が得られた3カ月ごとの月齢をFig. 1に示した。この図より項目149を除いて、月齢6〜48カ月前後でほぼそれぞれの項目が獲得されていることがわかった。また、項目の内容と通過月齢を詳細に検討することで、次に示す4つの点が明らかとなった。

第1点は、絵本の一つの活動であるページをめくるという行動(項目128)および絵に気づく行動(項目129, 126, 130, 133, 135)が月齢12か月ごろからすでに獲得されている点である。また、親に対して声を出したり、接近したりすることで絵本を要求する行動(項目125, 131)もまた、この頃には獲得されている。以上のことからもこの時期は、親子間ですでに絵本を介してのやりとりの準備が整っているといえる。

第2点は、絵本を介して行われるであろう親と子の基本的なやりとりのパターン(項目140, 137, 138)を月齢18カ月には獲得していることである。この時期ごろに、子どもは「イナイイナイバァー」(松谷・瀬川, 1967[12])のような繰り返しのある絵本(項目140)や具体物(項目135)、食べること、着替え、といった日常生活を描いた本(項目136)を好むようであるが、この2種類の本の構造性の違いが、発達に異なる影響を与えるのかどうかについては、ここでの結果からは述べることはできない。

第3点は、先に述べた本の種類にかかわらず、月齢27カ月以降、子どもは絵本自体の持つ構造性を理解していくらしいということである。絵と文に繰り返しのある絵本や具体的なものを描いた絵本、毎日のルーティンな活動を描いた絵本は、絵本の構造性を子どもが理解していく過程を容易にしているのであろう(項目134, 135, 139, 142, 147, 143)。

第4点は、月齢33カ月以降の子どもは、より複雑な構造性を有する絵本および日常生活のスクリプトやスキーマを絵本理解の手がかりとして利用できにくい絵本でも、理解できるようになっている点である(項目145, 144)。これは、子どもが絵本の構造性をスキーマとして獲得したことを示すものと考えられ、そして、その子ども自身にある絵本のスキーマを手がかりに、知識にないものを質問するという行動で(項目146)、内容理解を進めることができると推察された。

2. 月齢23カ月までの項目ネットワーク

月齢23カ月までに70%以上の通過率を示す絵本の項目と同様に70%以上の通過率を示す発達の項目とのネットワーク図をFig. 2に示した。127、133を除いた項目は、絵本以外の領域である他の発達の項目とともに一次元的な系列を示した(001 → 004 → 009 → 016 → 017 → 044…)。絵本の項目128「ページをめくろうとす

る」の獲得には、項目 001～044 までの獲得が先に生じる。これらの項目は、一つには、新生児が生得的に持っていると思われる情動的なもの（004，009）に対して大人（主に親）が視覚的、聴覚的、感覚的刺激を随伴させることで子どもに快反応を誘発させるやりとり（001，016，044）と見られる。そして、もう一つには乳幼児の注視能力や追視能力の発達（017）と見られる。これらの項目が先に生ずることで、項目 128 と順序性が等価であると判断された項目も獲得されることが示唆された（018，040，041，042：快反応、027：注視，054，077：追視）。また項目 128 は順序性が等価とされた項目のうち、項目 040、041、042 と質的に類似したものと考えられた。つまり、子どもに快反応を生じさせるやりとりが先に生じた後、獲得される動作模倣

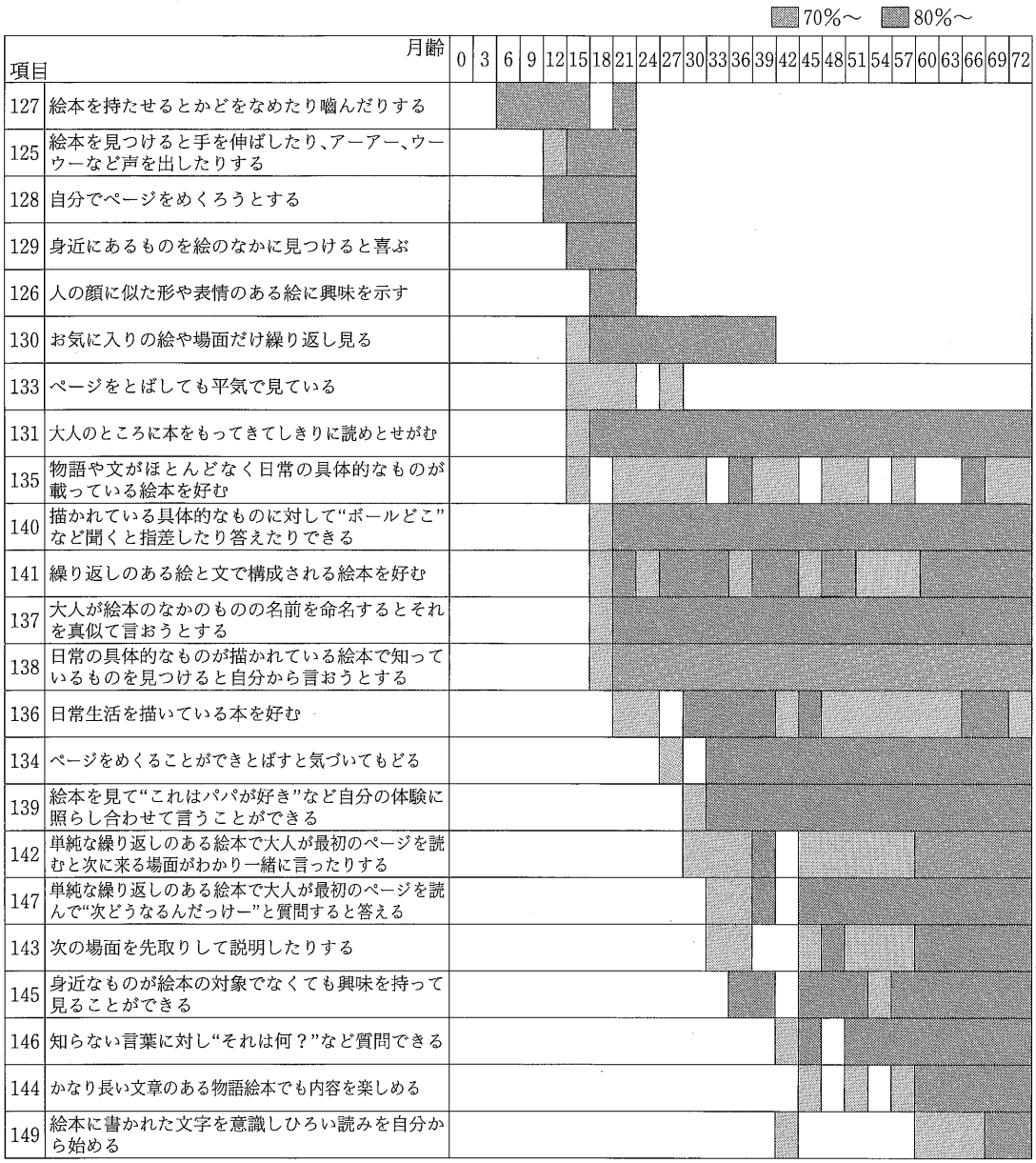

Fig. 1　絵本項目で通過率70%以上を示す月齢

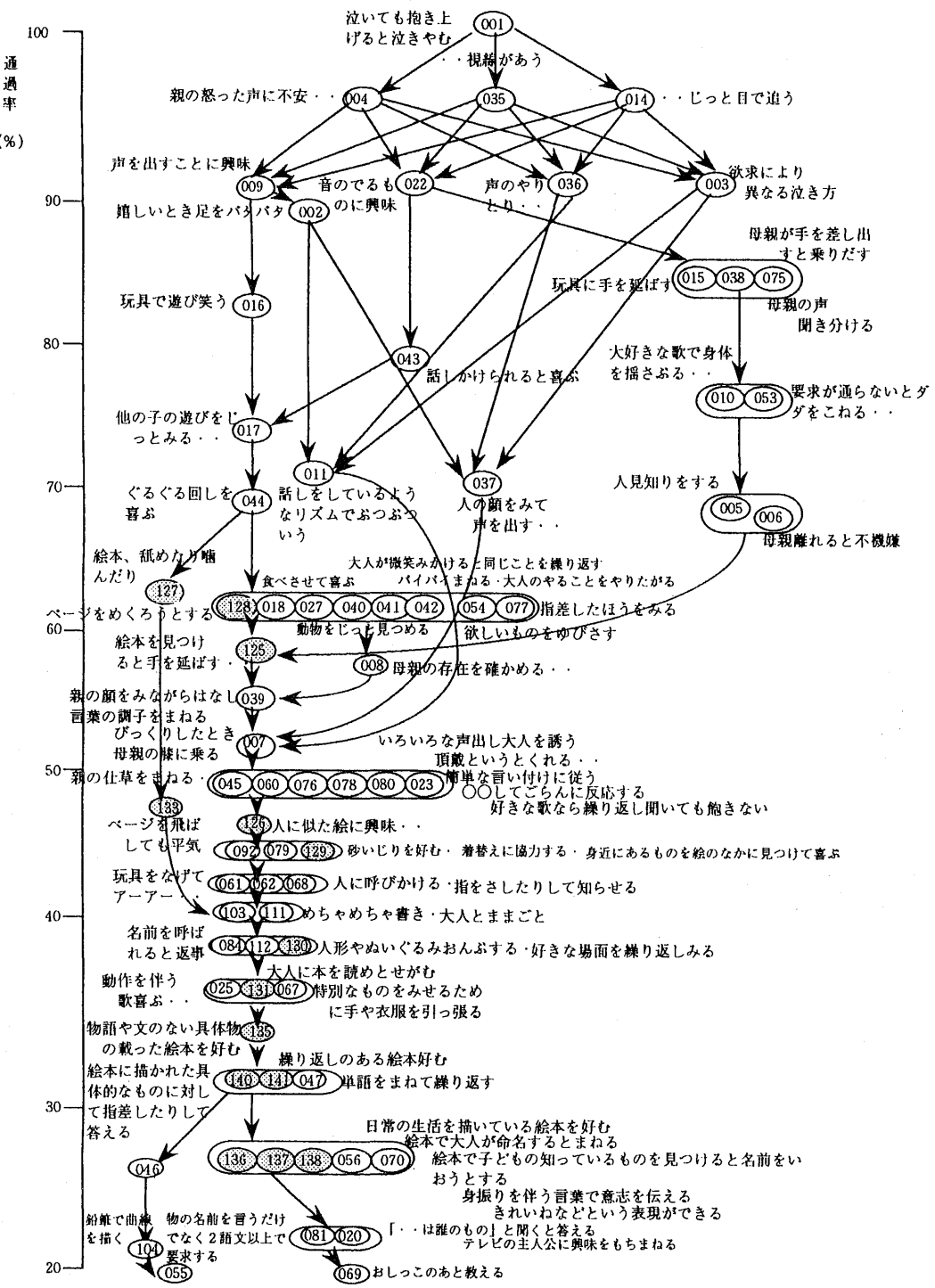

Fig. 2　月齢23カ月までの項目ネットワーク

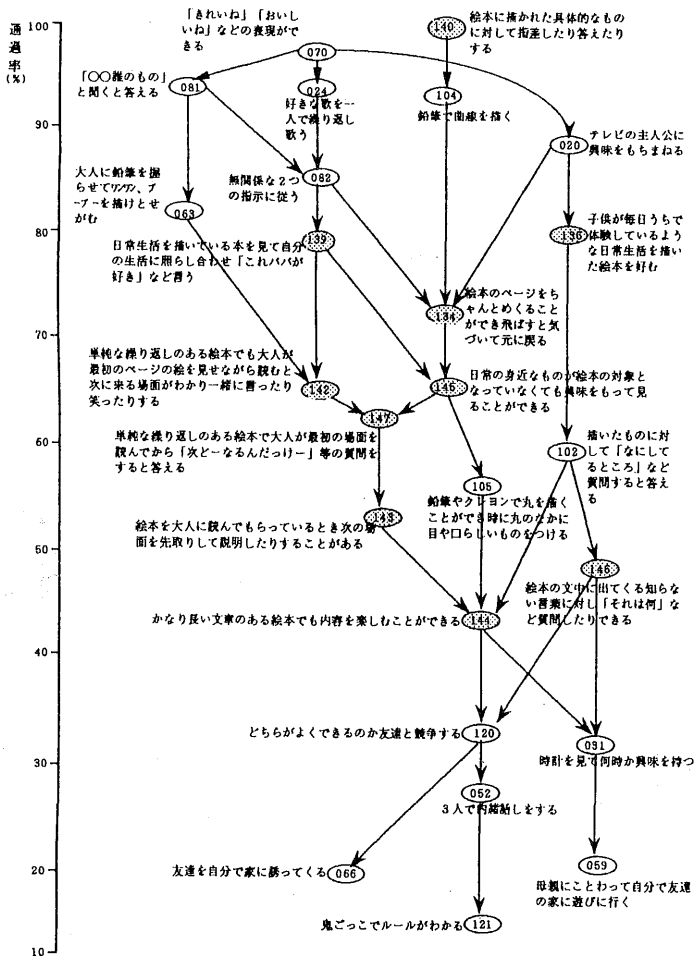

Fig. 3　月齢 24ヵ月～月齢 41ヵ月までの項目ネットワーク

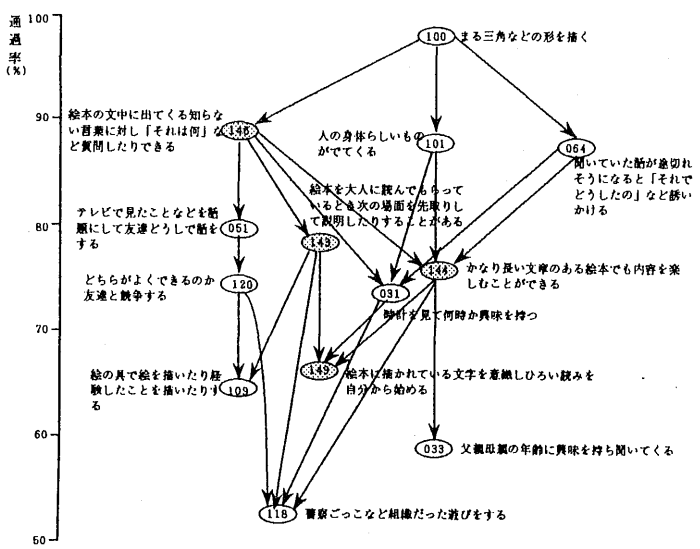

Fig. 4　月齢 42 カ月～月齢 74 カ月までの項目ネットワーク

のうちの一つの反応形式と考えられる。項目125「絵本を見つけると手を延ばす、声を出す」の獲得には、人やものを弁別しそれに対する要求を表わす行動が先に生じる（004 → 022 → 015・038・075 → 010・053 → 005・006）と考えられた。また、一次元的な系列の中の項目054「欲しいものを指差す」も、項目125の獲得前に生じる一つの要求を表す機能をもつ行動であると考えられた。絵本の項目126、129、130、135、141、136の獲得は、すでに獲得された快反応を生じさせるやりとりと、弁別能力の発達により、好みの活動がよりはっきりしてくること、また、日常のルーティンの活動が子どもの日常生活のスクリプトを形成(023，103，111，112)し、それが絵本での再認活動を支える役割をしていることで順次獲得されると考えられる。また、絵本の項目130「大人に本を読めとせがむ」の獲得は、主に要求行動の獲得(項目061，062，068，067)が先に生じ、絵本の項目140「絵本に描かれた具体的なものについて質問すると指差したりして答える」の獲得には、指示理解に関連する項目（項目079，084）が先に生じる。絵本の項目137、138の獲得には、上述したことに加え、音声模倣の活動(項目047)が先に生じている。以上のことから、絵本を介しての親と子の相互作用では、絵本の構造性の理解だけではなく、対人関係を成立していくためのコミュニケーションスキルに関わる絵本の項目も獲得されることが示唆された。

3．月齢24〜41カ月および月齢42〜74カ月までの項目ネットワーク

月齢12〜41カ月までの項目ネットワークの図をFig．3、月齢42〜74カ月までの項目ネットワークの図をFig．4に示した。Fig．4の高い月齢では、絵本の項目の通過率が初めから高い状況にあり、順序性を判断することが難しい状況にあること、また、月齢が上がるにつれて、絵本の項目の通過率の変動が大きくなり、発達の要因だけではなく環境的な要因の関与が強くうかがえた。そのため順序性の判断には、Fig．3の方がより適切であろうと考えられた。従ってFig．4で当初から高い通過率を示した項目139、134、142、145、147、143、144、146についてはFig．3で検討を行い、項目149についてはFig．4で検討した。

Fig．3に示された絵本の項目139、134、142、145、147、143、144、146は、領域II(024，020)、IV（070，063)、V（081，082)、VI(102，104，105)と関連を示していた。これらの項目内容を細かく検討していくと、子どもの記憶、理解の発達などが大きな要素となるのではないかと考えられた。それは、相手の質問を理解しまた保持して適切に答えるような項目（081，082，102)、記憶に保持されたものを再現するような項目（070，063，024，020，104，105）に分けて考えられた。このような記憶の発達は、子ども自身の中に絵本のスキーマを獲得させることを補助し、そしてそのスキーマの利用を可能にするため、具体的な手がかりの少ない内容であっても理解を容易にさせるのであろう。項目149の獲得については、絵本の構造性が理解されるということだけではなく、先行する項目100 → 101 → 031の順序性にも見られるように記号的な単位を描出できるようになること、記号的なものの利用によって子ども自身が、記号に意味を持たせることを学び、また、あるものの要素を構成する記号が意味を持つものであることに気づくことが先に生じることで、絵本の中の文字という一つの記号にも意味があることに気づくのであろうと考えられた。

IV．おわりに

本研究では、調査する月齢範囲が広いことから、現時点での子どもの月齢より以前に獲得されてしまっている項目では、母親の回答が曖昧になることが予測された。母親の回答をできるだけ正確に保持する狙いから、調査を月齢段階で3つに区切った。区切る月齢の判断には、注意深く配慮をしたが、中には、項目の獲得開始から80％前後までの通過率を示す月齢範囲の調査がなされず、順序性を検討するには不適格として、除外せざるをえなかった項目が生じた。

また、予想以上に絵本の項目に関する獲得が早かったために区切ったことがかえって、順序性を検討する妨げとなった。今後は、除外された項目が絵本の項目の獲得に関わるかどうかについて再度検討すること、また、調査対象範囲を設定し直すことで、順序関係を再検討する必要もあるであろう。しかし、先に述べた問題点を踏まえた上でも、Ordering Analysis の手法を用いた本研究は、絵本が発達のかなり早期の段階から発達援助として利用できることを、ある程度、明らかにしたといえるであろう。

Debaryshe (1993[5]) は、2歳代の年齢を対象にした研究において絵本が、言語スキルのうちの表出よりも受容により相関があることを述べている。絵本が、言語の理解に関連することは本研究でも子どもの記憶の発達とのかかわりで示唆された部分である。しかし、はじめにでも述べたとおり、ある立場の特定の視点から絵本の利用の有効性を検討するのは、それ以外での有効性を見落とす原因ともいえる。絵本という一つの言語環境について考察するとき、「絵本を媒介とする言語活動は、認識活動を支えるあらゆる働きを総動員して初めて可能になる」(山口・高橋・小坂, 1994[21]) といえる。さらに、絵本が発達を援助する有効な素材であると考えるときには、今回明らかになった絵本を介しての対人関係スキルの獲得(絵本を要求するスキル、内容を理解し質問に応じるスキル、内容を理解するために質問をするスキルなど) についても検討していくことが重要であろう。

今後は、本研究で明らかにされたことを基に、発達レベルで異なる絵本の項目の獲得が、いかに有効に発達の援助として利用できるのかをさらに具体的に検証していきたいと考えている。

文　献

1) Airasian, P. W. and Bart, W. M. (1973) Ordering theory : A new and useful measurement model. Educational Technology, 5, 56-60.
2) Butler, D. (1980) Cushla and her books. Boston, Horn Book.
3) Beveridge, M., Conti-Ramsden, G. and Leudar, I. (1989) Language and communication in mentally handicapped people. Chapman and Hall Ltd., 今野和夫・清水貞夫訳 (1994) 知的障害者の言語とコミュニケーション. 学苑社.
4) Cornell, E. H., Senechal , M., and Broda, L. S. (1988) Recall of picture books by 3-year-old children : Testing and repetition effects in joint reading activities. Journal of Educational Psychology, 80(4), 537-542.
5) Debaryshe, B. D. (1993) Joint picture-book reading correlates of early oral language skill. Journal of Language, 20(2), 455-461.
6) DeLoache, J. S. and DeMendoza (1987) Joint picturebook interaction of mothers and 1-year-old children. British Journal of Developmental Psychology, 5, 111-123.
7) 石川由美子・石川　隆 (1994) 絵本の特性に関する研究. 日本保育学会第47回大会発表論文集, 564-565.
8) 三宅信一・清水貞夫・及川克紀 (1984a) Ordering theory の諸手法の比較 : データにおける順序性判定基準の検討. 電子通信学会教育技術研究報告, ET83-10, 45-48.
9) 三宅信一・清水貞夫・及川克紀 (1984b) Ordering theory の諸手法の比較 (2) : 仮想データによる検証. 電子通信学会教育技術研究報告, ET84-4, 25-29.
10) 松居　直 (1981) わたしの絵本論 : 0歳からの絵本. 国土社
11) 松岡享子 (1987) えほんのせかい　こどものせかい. 日本エディタースクール出版部.
12) 松谷みよこ・瀬川康男 (1967) いないいないばあー. 童心社.
13) Ninio, A. (1983) Joint book reading as a multiple vocabulary acquisition device. Developmental Psychology, 19(3), 445-451.
14) 永田桂子 (1985) 乳幼児絵本の機能的側面についての一考察 : 事例研究を通して. 日本保育学会第38回大会発表論文集, 156-157.
15) Pellegrini, A. D. and Brody, G. H. (1985) Parents' book-reading habits with their children. Journal of Education Psychology,

77(3), 332-340.
16) 佐々木宏子 (1975) 絵本と想像性：三歳前の子どもにとって絵本とはなにか．高文堂．
17) 高木和子 (1978) 物語シェマの形成における幼児むけ物語のもつくり返し構造の役割．山形大学紀要 (教育科学)，7(1)，83-105．
18) 津守真・稲毛和子 (1965) 乳幼児精神発達診断法 (3〜7)．大日本図書．
19) Whitehurst, G. J., Falco, F. L., Fischel, J. E., DeBaryshe, B. D., Valdez-Menchaca, M. C., and Caulfield, M. (1988) Accelerating language development through picture book reading. Developmental Psychology, 24(4), 552-559.
20) 渡部茂男 (1978) 絵本の与え方．日本エディタースクール出版部．
21) 山口茂嘉・高橋敏之・小坂圭子 (1994) 幼児期における言語環境としての絵本に関する一考察．岡山大学教育学部紀要，97，41-46．
22) Yoshinaga-Itano, C. and Downey, D. M. (1986) A hearing-impaired child's acqisition of schemata: something's missing. Topics in Language Disorders, 7(1), 45-57.

Bull. Spec. Educ. 20, 83-91, 1996

Comprehension of Picture Books and Developmental Order: A Basic Study on the Use of Picture Books as an Aid to Child Development

Yumiko ISHIKAWA and Hisao MAEKAWA

The aim of this article is to examine how the activities mediated through picture books relate to the process of children's development and how children acquire them. Subjects were from newborn infants to six years old. Their mothers answered the questionnaire. Ordering analysis was adapted to the pair of each item. Then, we judged the acquisition orders between items on its result. The acquisition orders of picture book items suggest that prerequisite factors for the acquisition of picture book items are not only contextual comprehension and structural understanding of picture books, but also the developmental skills related to the personal relation, such as demanding, understanding of direction and transmission. It is also suggested that memory development takes part in the comprehension of the context and structural understanding of picture books. These results are basic information that we make use of picture books as a developmental aid.

Key words: comprehension of picture book, developmental aid, orderling analysis, personal relations